

## 絵島事件以後と其磧

この夏、延宝末から享保末年に至る一連の雑録類を通読する機会を得た。『犬方丈記』、『月堂見聞集』、『享保世話』等々、既に何度か必要に応じて拾い読みをしていたものばかりであったが、改めて読み直してみても、大きなショックを禁じ得なかった。それは、西鶴や其磧の浮世草子とあまりにも落差があったからである。

例えば、西鶴が『好色一代男』を著した天和二（一六八二）年。京童たちは世之介のように、太平の世を謳歌していただろうか。答えは、否である。今、長明の著した『犬方丈記』は言う、延宝末年から三年越しに続いた飢餓と疫病が、この年の正月には頂点に達し、洛中はさながら地獄絵で、泉福寺や誓願寺の施行には、施しを求めて一万数千人の乞食が群れを成したと。

これが、西鶴の活躍した綱吉時代の、もう一つの顔でもあったのだ。<sup>（註一）</sup>同じことが、其磧の著作の大半が集中している吉宗の時代についても言える。

吉宗の享保。多少の異論があるにしても、彼が名君であり、その治世に高い評価が与えられていることは確かであろう。しかし、一方では、蝗害や飢饉などで百万人もの人口が減じたほどの激烈な時代でもあったのだ。<sup>（註二）</sup>元禄から享保末年迄の巷説を集めた『月堂見聞集』には火事、台風、洪水、地震、蝗害の記録が横溢している。またそれに連動して（天災・人災からの救済を求めたためか）、開帳の記事も多いのである。

○死でも人のおしまぬ物 鼠取らぬ猫と井上河内守  
○無理で人をこまらせる物 生酔と水野和泉守

## 篠原進

○人のにくがる物 人喰犬と有馬兵庫頭（以上巻一）  
○にくい物 中島三甫右衛門と水野和泉守  
○後家方のよい物 山下金作と月光院様  
○わるい物 水野和泉守、懷中おはぐろ  
○をしき姫 竹姫様、芝口の見付  
○みじかき物 水野隼人正、十月中十日（以上巻三）

『享保世話』に載る、「物揃」「物づくし」だ。因みに、水野隼人は享保一〇年七月廿八日に松の廊下で毛利主水に斬りつけた乱心者（『月堂見聞集』巻一八）。月光院は家宣の側室で、前將軍家継の生母。竹姫は將軍吉宗の養女で、二度の不縁の後、享保一四年二月一日に島津大隅守に嫁しているが、その時の御上使役が水野和泉守であった（『月堂見聞集』巻二二）。それにしても、この昵近さはどうだ。そこに込められた、「毒」と「棘」は読む者を圧倒する。少くとも、この記録者にとつての享保とは、「なげきかなしむ物」諸人萬人（巻二）であって、あまり良い時代ではなかったと言えるであろう。

なるほど、時代相は常に多面的であり、同時代観には個人差がある。それゆえ、右の雑録が透かして見せた時代は、あくまでも記録者の私見に過ぎないという見方も可能だ。しかし、それにしても浮世草子との落差が大き過ぎる。この落差は、どこに起因するのであろうか。

当面、問題を其磧に絞ろう。其磧にとって享保とはどういう時代だったのだろうか。彼は、時代を正しく語っただろうか。発言すべき場面で、きつちりと発言しているだろうか。もし、〈沈黙〉を守っていたとするなら、その原因は奈辺に

あったのだろうか。以上の問題意識に基づき、其積年譜の処々に見られる〈沈黙〉や〈空白〉の意味を読み込んでみたのが本稿である。

# 一

正徳四年正月一二日。「三位ノ御方」(月光院)は、女中たちに寛永寺(綱吉の廟所)および増上寺(家宣の廟所)への代参を命ずる。総勢一二人を二組に分け、増上寺には大年寄の絵島が、寛永寺には御年寄の宮地が振り向けられることになった。しかし、増上寺で香奠を捧げた絵島は、料理を準備して方丈で待つ僧たちに目もくれず木挽町へ繰り込み、山村座の棧敷で、役者を交えて酒宴をはじめたのである。間もなく、宮地も合流し、一二人の女中たちは中ノ下刻(午後四時過ぎ)まで遊び尽くして帰城する。同月一六日、増上寺に参詣した家継の御乳人は、その祐海和尚から彼女たちの行状を聞く。方丈で待ちぼうけを食った僧らは、女中たちの会話から彼女らの木挽町行きを知り、酒宴ぶりを確認していたのであった。驚いた御乳人から月光院へと経緯が報告され、遂には老中たちの知るところとなった。

以上が、国会図書館所蔵『江島實記』(219/38)の伝える絵島事件の発端である。『江島實記』は、写本で大本一冊(四一・五丁)。書き題簽の脇に、「正徳四年挽引町狂言座山村長太夫断絶の記」とあるが、筆写した年代は不明。因みに、最終丁の最終行に「文久壬戌年十月六日」とある。しかし、本文とは墨色も違うし明らかに別筆であり、筆写した年代とは認め難い。

絵島事件の記録については、管見の限りでも、『江島御預り記』、『絵島記』、『江島始末集成』、『絵島騒動記』、『江島宮路桜山三女中噂之事』、『絵島流罪之記』、『三女中御刑罰之事』、『生島新五郎遠流筆記』等々、十数編あり、事件に関係した三女中名の表記のみをとりあげても、江島と絵島、宮路と宮地、梅山と桜山というような状態で、内容の異同も少なくない。しかし、本稿の主旨はそれらの異同の詳細を検証する点にあるのではないので、『繪島罪断事畧』などを適宜参照

しながら、もう少し『江島實記』の記述を追ってみよう。

二月二日より調べは本格化し、七日には、狂言作者中村清五郎や生嶋新五郎らも奉行所に呼び出される。そして、彼らの供述から、様々な事実が明らかになっていく。それによれば、最初に絵島に接近したのは清五郎で、彼は絵島召仕の針明と婚姻するほどの親密な仲でもあった。また、生嶋は妻が曾て絵島と同じ奉公先(尾張様)にいたという縁で知り合い、絵島とは前年の四月から付き合うようになつていたのであるという。その後、調べは座本の山村長太夫、市川団十郎、森田勘弥らに迄広がり、堺町、吹屋町の両芝居は二二日より停止となる。こうして、江戸の歌舞伎界はパニック状態に陥るのだ。一方、絵島の力で成上った彼女の兄弟(白井平右衛門、豊嶋平八郎)の乱れた性が暴露され、絵島の取り巻きである医師(奥山交竹院)、商人(後藤縫殿介、梅屋善六)らの跳梁ぶりも次々と明らかにされていく。審議は異例の速さで進み、三月五日には評定所より裁決が出されるに至る。事件に連座したとして取り調べを受けた者約千五百人。絵島および生嶋は遠流(その後絵島は罪を減ぜられて高遠へ)。白井平右衛門は死罪。奥山喜内は主家の水戸殿にお預けになった後死罪。このように裁決は苛烈なものであった。

以上が事件の概要であるが、ここで問題なのは奥山喜内という人物に対する処罰の厳しさである。喜内は交竹院の弟で二九歳。当時水戸家の徒頭を勤めていた。そんな彼がなぜ死罪となつたのか。その理由について、『江島實記』はこう説明する。「喜内事年来江島ト相親シ、所々遊興場ニ相伴ヒ或ハ遊女ト参會セシメ或ハ狂言座ノ役者ト参會セシメ種々姦犯ノ罪不可計<sup>(後点引町寄)</sup>卒」と。また彼の娘を絵島の養女としたという事も当局の印象を悪くしたのかも知れない。しかし、それにしては彼に対する処罰は、少し厳し過ぎはしないだろうか。

この点を『有章院殿御実紀』で検してみると、興味深い記述が発見できる。

後閣の女房繪島。宮路。ともに親戚の家にめしあづけらる。これは正月十二日東叡。三

縁両山にまうづるとて。みちよりかたらひ合せ。おなじ女房等ともなひ。木挽町の劇場にまかり。薄暮に及びてかへりぬ。二人ともに年寄をもつとめながら。かうやうのふるまひせしを。きびしくがめらるべけれど。寛有せらるゝにより。かたくつしみるべしとなり。おなじことにより。梅山。吉川等の女房七人禁錮せらる。(正徳四年二月二日『徳川実紀』・巻七・三六六頁から三六七頁)。

傍点部で明らかな如く、絵島らは二月二日の段階において、一度は「寛有」されているのだ。それが、一ヶ月後には一変する。

この日女房納島遠調せらる。これは後園にておもたゞしき職つかふまつりながら。身を行ひたゞしからず。奥山喜内といへるが導もて遊樂にふけり。御使率はり他にいづるつるで。また暇休たまはりし折から。ゆかりもなき家に信宿し。そのしなをもえらばず。みだりに人をちかづけ。あるは劇場にあそび。俳優となれむつみ。あるは娼家によぎり。娼婦をむかへ。酒宴をひらきし事などしばゝなりき。そのみならずおなじ女房を。遊興にともなひしことも。そのつみ多しといへども。寛有もて死一等を減じ。かくは處せられぬ(同・正徳四年三月五日・三七二頁)。

なぜ一変したのか。それは、そこにわざわざ奥山喜内(傍点部)の名を出していることと無縁ではなさそうだ。いったいこの一件に於ける彼の役割りは、何だったのだろうか。ここで、もう一度『江島實記』の記述に立ち戻ってみよう。注目したのは、彼の兄交竹院の容疑事実「(絵島を)ヒソカニ私宅ニ止宿セシメ或ハ猥リニ外人に對面セシメ」とあることだ。絵島が交竹院宅に泊った際、鼻紙袋を落していったため、二人の仲が疑われるというような事件もあったらしい(『江島實記』)。しかし、この場合「外人」とあるので、絵島の相手は交竹院ではあり得ない。また、おそらく生嶋新五郎でもないだろう(山村長太夫の父・玄頼の証言)。彼が重罪となったのは別の理由があるのだ(後述する年寄増見との前科)。それでは、絵島の真の相手は誰だったのだろうか。それについて、『江島實記』は含みのある記述をしている。「喜内事江島ヲ誘引シ種々猥リカハシキ事之有」と。奥山喜内がどうも怪しいのである。生嶋新五郎四四歳。交竹院四二歳。奥山喜内二九歳。当年三三歳で「才覚利発」、女侠的な性格を持つ絵島の愛玩物としては四歳年下の喜内こそが最も相応しい相手ではなかったろうか。

ともかく、事件当初、当局は事態を甘く見ていた。それは、絵島・生嶋事件と読んでいたからである。確かに、絵島・生嶋事件であつたならそれほど問題にはならなかつたのだ。なぜなら、奥女中が役者に熱を上げるといった事件は既に幾つかの前例があつたからである。例えば、年寄の増見母子が生嶋新五郎・大吉に恋慕した事件。この時は、増見が「御預け」となり、新五郎はお構いなし(大吉は病死)というところで穏便な裁決が下されている(『江島實記』)。従つて、絵島・生嶋事件ならその判例に従つて「寛有」でよかつたのだ。しかし、それで済まなかつたのは、絵島・奥山事件ともいうべき大奥内部のスキヤンダルだったからではないだろうか。また、事件がこれほどまでに大きくなつたのには他にも理由があつた。それは、この事件の背後に様々な政治的思惑が絡んでいたからである。

絵島事件の政治力学については、奈良本辰也氏の鋭い考察がある(註四)。この事件の裏には天英院対月光院という大奥の力関係が伏在しており、その先には病弱な將軍家継のその後をめぐる紀州対尾張という世継ぎ争いの図式さえも想定できると。つまり、月光院の年寄である絵島の事件は、対立相手の天英院側にとつては恰好の抗撃材料であり、そんな思惑の中で、絵島の事件が拡大されフレイムアップされて行つたといふのである。

しかし、私はもう一つの側面も、見逃しには出来ないと思う。それについて、『月堂見聞集』(巻七)に記録された次の記事はすこぶる示唆的だ。

芝居役者十三人 権太原にて打首、并座本二人三ヶ津追払の事は虚説也

デマゴーク。一時的にもせよ、歌舞伎役者大粛清の噂が流れたというのである。なるほど、事件に噂はつきものだ。だが、少し悪意が強過ぎないだろうか。それにこの噂は、事件のかなり早い段階から流れていたようなのである。誰がリークしたのか。そして、得するのは誰だったのか。

## 二

生嶋新五郎を、其磯は江戸「立役」の総巻頭「上上吉」に配した。そして「本草庵無一坊」と「屋敷勅奥女中」らとの会話の体裁を借りて、こう評している。

此人巻頭にきはまりました。第一きりやうよくぬれやつし丹前當風になふたる御名人。相かはらず山村座にゐなりのおつとめ。心中迄かよさそふで。如中方のすかせらるゝも、断（傍点引用者）（正徳四年正月刊『役者目利講』）

傍点部は、その直後の事件を暗示するようで興味深いのだが、この評価は一月遅れで八文字屋から出た『役者色景圖』にも共通している。「藝のおもといたすはぬれやつし所作。是をかぶきの本間と申す。なぜなれば顔を紅や墨で彩色せず生のまゝの藝三つ共に新五郎殿につく仕手はござらぬ殊にお江戸今名物男」といづれにせよ、生嶋新五郎が江戸を代表する立役であったことは動かない。つまり、前節の絵島スキャンダルを意図的に利用しようとする者にとって、彼が事件の関係者だったという事実ほど都合のよい宣伝材料はないのである。そうした意志の実現に向けて、生嶋新五郎を代表とする芝居関係者がしだいに表面に押し出されてくる。

当局は、これを機に芝居関係者への取締りを強めようとしていた。実は、これまでも増見生嶋事件（前述）などがあり、役者たちの跳梁ぶりに警告の必要を感じていた時もあったのだ。そんな状況を背景に、先掲の「歌舞伎役者一三人処刑」という、ニセの情報が流されている。こう考えて来ると、どうも当局周辺がデマの発生源として疑わしいと思えてくる。ともかく、これ以降矢継ぎ早に芝居関係者への禁令が出されて行く。『繪島罪斷事畧』で、その要点を確認しておこう。

正徳四年三月、まず寺社奉行から寺社境内における芝居興行の禁止が申し渡される。続いて、同月九日、「堺町木挽町狂言座并茶屋共へ被仰渡候寛」として、

七項目が提示されている。要点は次の通りである。(1)二、三階席の禁止。(2)棧敷から茶屋、座本の居宅、茶屋等への通路を設ける事、および、役者が茶屋や自宅で客の相手をする事の禁止。(3)棧敷簾を掛けたり、幕や屏風で外からの見通しを遮断することの禁止。(4)芝居の前屋根を軽くすべきこと。(5)役者の衣装が美麗なので、以後縮袖木綿を用いるようにすべきこと。(6)上演時間は七ツ半までにすべきこと。(7)芝居小屋近くの茶屋は座敷のようにせず軽くすること。

取締りの中心は、風紀を正し、役者と客との交流を断つことにあった。続いて、同年三月一日、「狂言芝居之儀ニ付御書付」「寺社奉行江豊後守渡之」として同内容の禁令が出て、取り締りが確認されている。

近年以来堺町木挽町狂言芝居、二階三階惣屋敷を構へ、衣服等美麗を盡し、其外兩所之茶屋等迄結構ニ及び、諸事制外之事共出来候處ニ、急度制止無之、且又去年中も御沙汰有之候町々候女之事も、斷絶無難ニ相聞候、惣して御沙汰として被仰出候事共、無程違犯之聲有之候得共、其沙汰ニ及はれず候事、不可然事ニ候間、自今以後、常々無油斷被遂吟味候様ニ可被相心得候以上（『徳川禁令考』前集五・三四〇二）。

『江島實記』によれば、正徳四年の三月六日には、有罪となった四人（生嶋新五郎、山村長太夫、淵井半四郎、中村清五郎）を除き芝居関係者の全員が釈放され、三月九日からは山村座以外の三座は上演を許可されたという。しかし、この事件の芝居関係者に与えた傷は思いのほか深かった。それは、単なる弾圧事件ではなかったからである。弾圧ならこれまでにも度々あった。たとえば元禄一六年の『曙曾我夜討』（中村座）の差し止め事件。『歌舞伎年表』（二九〇頁）は元禄一五年のこととしてこう記録している。

二月十六日より、中村座、「曙曾我夜討」。赤穂義士二件を曾我に仕組み、十郎（七三郎）五郎（傳吉）工藤（嶋川十左衛門）三日にして差止めらる。

と。それでも、そのころは中村七三郎、市川団十郎、坂田藤十郎といった名優が健在で、むしろその事件をバネとしながら元禄歌舞伎の大きな花を咲かせた。だが、今回は少し趣きが違うのだ。つまり、歌舞伎の演目に対してではなく、歌舞

伎風俗の健全化に向けて当局の手が入ったのである。

いったい、歌舞伎の魅力とは何か。それは、役者の魅力だ。役者が舞台空間に醸し出す、華やかで淫靡な光景。その淫靡さは、役者の舞台外の行為に対する或る種の期待と危険さに支えられていたのではなかったろうか。そうした歌舞伎の属性が事件を機に健全化の名のもと、制御されようとしていたのだ。こうして、歌舞伎はパワーを徐徐に失いながら、享保へと突入する。

### 三

当代随一の人気役者の関与した大奥スキャンダル。これほどニュースヴァリュイのある事件を、噂話の大好きな江戸雀が放っておく筈はない。情報は走り、たちまちのうちに諸国へと広まっていく。それは、京都の本島知辰（月堂）にも即座に届いた。彼の手になる『月堂見聞集』（巻七）には、「江戸より來候書付寫」として、「二月十六日出状、同廿五日京着」の情報（統報は同月二十七日に来る）が、異例のスペースを割き、詳細に記されている。内容は『江島實記』とはほぼ重なるので触れないが、この情報網の広さと、予想外に速い伝播力とは注目に値する。

幅広い情報の網を利用する一方で、受信したものを操作、変形して、情報の再生産をする役割りを担っていたのが、当時の歌舞伎・浄瑠璃・浮世草子であった。しかし歌舞伎や浄瑠璃は沈黙し、浮世草子の反応は鈍かった。動きが出たのは、事件の二年後。つまり正徳六（一七一六）年の正月からである。『今源氏空船』作者は西沢一風。彼の反応の速さには定評があり、赤穂の討入り事件の際も、他に先駆けて『傾城武道桜』（宝永二年）を著していた。『曙曾我夜討』差止め事件や、絵島事件以後の緊迫した空気を考えるなら、筆が鈍っても当然である。しかし、彼は書いた。それは、やつしでかわせる、という自信があったからである。その方法は『傾城武道桜』で試みられ、「赤穂事件より遊女の敵討」という変換実験は、既に成功を収めていたのだ（拙稿「傳受紙子臆斷譜『青山語文』6号」。まず彼は序において、「元より愚蒙の某。久しく此道中絶しかば」と書き、宝

永七（一七一〇）年の『傾城伽羅三味線』以来、六年ぶりに筆を執ることの弁解をする。以下、作者が石山寺に七日の通夜をして祈願した際、八月一日の湖水に「中村の艶男」と「九重の艶女」とが密会を重ねる様子が映ったのを、「夢ともなく幻心に書きとゞめ、紫式部の故事にならない『今源氏空船』として、「お笑草」を提示するという序章が配される。そして話はこう展開する。つまり、京の牙僧であるおすまは、古今新左衛門座の人気役者である中村四郎五郎に夢中になる。仲介を頼んだ医者（見宅）の智恵で、彼女は病氣養生の息女を装い、檻に忍ばせた四郎五郎と密会。その後大胆になり、お沢・お宮・古今新左衛門・生嶋新五郎らと交えて遊興する。しかし、折悪しく彼女らの主人（三星屋三郎治郎）が同じ店におり、詮議となる。そして遊興費捻出のため、おすまらが客からの預り金を横領したことが発覚。おすまは空船で隠岐へ、中村は新方島へと流される。新方島で中村は、流人頭の娘小松と親しくなるが、おすまの霊に彼女が釈放されたことを教えられ、小松との再会を約しながら迎える船に乗る。

大年寄の絵島を牙僧のおすまに、当代随一の人気役者生嶋新五郎を四年前に死んだ中村四郎五郎に。そして、將軍家継の病氣さえも治したという御典医交竹院、および水戸家の徒頭の喜六兄弟を両者の複合的存在ともいふべき藪医の見宅へと置換し、そうした装置の奏でる圧倒的な笑いの渦にモデルを閉じ込め、当局の取り締りを逃れるところに一風の方法があった。例えば、見宅について、彼は言う、「西鶴の書かれし絵馬醫者とは人こそ知らね此人の事」と。すなわち、『西鶴織留』（巻四の二「命に掛の乞所」）に出る暇な歩行医者を踏まえているのであるが、まさしく見宅は「役者評判」や「好色本」を愛読し、療治も「平仮名の衆方視矩をたより」というどこか情けない好人物として造型されているのだ。そして、トリックスターとして、笑いを醸し、その中に事件のにおいを薄めていくという重要な役割りを担っていたのである。

ところで、『月堂見聞集』には明らかに誤まりと思える情報が記録されている。それは、「江島殿はうつぼ舟に乗せ流れ次第の由」とある部分だ。これは、「月光院様達而御託に付」（『繪島罪断事畧』）「三月十三日江嶋事内藤駿河守へ御預依之同

月廿六日信竊高遠へ赴ク騎馬二騎」(『江島實記』)とあるのが正しい。しかし、『今源氏空船』では、その誤った情報に変形、拡大されてむしろ生かされているのだ。同じことが、『今源氏空船』の後半に於けるおすまと四郎五郎との歌の贈答についてもいえる。すなわち、彼女が「むつごとを語り合せん人もな浮世の夢もなかばさむやと」と詠んだのに対し、彼が「あけぬ世にやがて迷へる心にはいづれを夢とわきて語らん」と応じたものであるが、これも実説には遠い。しかし、まんざら嘘というわけでもないのだ。それは『江島實記』に、絵島と交竹院とが流刑に際してそれぞれ別々に詠んだ歌が、こう記録されているからだ。「浮世ニハ又飯ラメヤ武蔵禁ノ月ノ光リノ影モ恥カシ」「流レ行身ハ浮洲ノ哀レトモ波ノ寄瀬ノシカラミモナシ」と。

つまり、相互には特に関連性を持たないエピソード(この場合、虚実とり混ぜての情報)を巧妙にちりばめ、それに変形と滑稽という味付けを施したのが一風の方法であり、その味付けこそが一風の真骨頂だったのである。こうして、新しい絵島事件が形成され、増殖運動を開始することとなる。

一ヶ月後(正徳六年二月)、『西鶴傳授車』が出された。作者は天狗堂転達というが正体は分らない。地獄を舞台として、西鶴を活躍させ、結局は夢という結末である。こうした周到な配慮のもと、巧みに絵島事件が盛り込まれて行く。

赤村黒右衛門ら四人の金持衆は、西鶴に錢を貸出す法を伝授され、巨富を得る。しかし、彼らの欲は尽きず、近所の浪人の娘を闇魔大王に献上し、歓心を買う。娘は浮舟と名のり、たちまち大王を虜とする。しかし、彼女は西鶴の芝居に出演した萩野長太夫の噂を聞き、見ぬ恋に馴染む。わうちやく院の仲介で、葛籠にひそんだ長太夫と密会。以後大胆になり、「饅頭となり小袖となりて長櫃」に潜ませる。また仮病を装い調伏と称して、長太夫らを山伏姿で、導き入れる。しかし、遂には発覚し、浮舟はうかれ船に、長太夫はうつは船に、錢座の衆は高瀬船に乗せられて流される。

一風ほどの流暢さはないにしても、身分の高い女性と役者との絡み、そして、

それが発覚して、「うつは船」で流される等という筋に、『今源氏空船』との共通点が見られる。注目したいのは、長太夫が葛籠や長櫃に忍び、饅頭や小袖と偽って潜入し、密会したと書いていることである。しかし、これまで見て来た事件の記録には、そうした(大奥での密会というふうなあまりにも大胆な)事実はなかったのだ。もちろん、『今源氏空船』にも「櫃」に四郎五郎を忍ばせる趣向が用いられていたことを考えるなら、その趣向を借りたと考えられないこともない。だが、両者の刊行時期には一ヶ月の差しかないのである。となれば、彼らの受けた情報自体に誤りがあったと見るべきであろう。そして、その誤った情報も既に変形され、増殖運動を開始しつつあったのである。小説化された情報はそうした増殖活動に一層拍車をかけることとなった。事件(情報)は拡大され、仮構され、捏造され、絵島喜内事件は世人の関心を魅きやすい絵島生嶋事件へと変貌を遂げている。

享保三(一七一八)年正月には、久二軒鱗長の『猿源氏色芝居』が出る。この作品について、頼原退蔵氏は「文章が簡潔で脚色も面白く(鱗長の作中)最もすぐれたもの」(『日本文学書目解説五』七九頁)と評し、長谷川強氏は「構成は散漫、時事を扱うことを意識しておぼめかしが多く、叙述は透明を欠き、際物的興味を狙っただけの作品」(『日本古典文学大辞典』)と解説している。評価は全く対照的なのであるが、私は長谷川氏に左袒したい。特に桃源境の趣向を導入した後半、尼が主人公の縁者(小太郎)に諷言を託す部分など、全く唐突で蕪雜さは否めないのだ。

簡単に筋を記すと、曾て猿源氏の異名をとっていた西福は、お物師との間にお鈴という娘をもうける。お鈴は高師直の奥女中室井の部屋子として奉公し、早速気に入られ、お局に出世することとなる。しかし、彼女は役者(早苗)に恋慕し、局の中で密会するが、夢と分る。役者絵を見たり、女中の豊島らが吹き込んだこともあり、お鈴はますます役者に夢中となる。役者の半の介を長持に忍ばせなどして、女中たちが遊ぶところ、横萩折右衛門らに咎められる。以下、先述の桃源

境の趣向が挿入されている。

文学作品としての評価はともかく、『猿源氏色芝居』が数多くの興味深い問題を内包していることは確かだ。一は、師直の時代に『世界』をとったこと。鱗長もそうした周到な配慮で安全性を確保しながら、様々な絵島事件の記号をちりばめた。つまり、奥女中と役者の密会という大筋はもちろん、長持に役者を忍ばせたという俗説もここに生かされているのである。また、お鈴をそのかす女中の豊島は、絵島の弟豊嶋平八郎を彷彿させるし、太鞍医者（註七）の柳沢は交竹院と柳沢吉保との複合的人物とも考えることができる。それどころかお鈴を、月光院（註八）『新潮日本文学大辞典』や綱吉の母桂昌院（註九）『日本古典文学大辞典』に重ね合わせる見方さえもあって、毒は思いのほか強そうなのだ。

二は、「我年ごろ役者評判に心をよせて学文油断なく新版のかんばん見るたびに目をきろつかせ」(序)と書いている如く、演劇に関する様々な情報が盛り込まれていることだ。例えば、元禄十一年正月の初演以来好評を得ていた『けいせい浅間嶽』(早雲長太夫座)について、「水木が七げけ、沢之丞が浅間のおんれう」(巻一の三)と書く一方、芝居に關しての蘊蓄を傾けたり(巻三の三、同四の一)、『あいご十二段』や『助六』を變形しての趣向(巻四の二)なども見られる。

もちろん、演劇以外の同時代的情報も多く、「石川が妻の田舎いたり」「理学じまんに偏屈を高く伊藤氏」(巻五の一)と書いて石川六兵衛の妻や伊藤仁斎のことに触れたり、「大きやうじのおさんが二ねんごしの禁獄を出で小荷駄のせなかに船ゆるぎせしありさま」(同)という興味深い記述さえもある。

いずれにせよ、この作品は絵島事件を軸としつつ、そこに多様な当世の情報を盛り込もうとした意欲作であった。そんな意図が実を結ばなかったのは、長編としての十分な構成力を持ち得なかった作者の力不足のためと言ってよいだろう。

以上、絵島事件に材を採った三浮世草子を眺めた。霊夢（註一〇）『今源氏空船』、地獄（註一一）『西鶴傳授車』、桃源境（註一二）『猿源氏色芝居』と、それぞれ趣向は違っても、目ざすものはただひとつ。それは、いかに当世から逃げるかということである。当世の事件をなまのまに語れるほど時代は甘くなかった。なるほど、「近年米につれ

て味噌塩薪も唯ならぬ値段。うつの山の十団子（註一三）さへ小さくなりました世の中」  
『西鶴傳授車』巻三の三)という言辭には時代批判がある。しかし、それも地獄に『世界』を置き換えてはじめて吐くことが出来たのである。ともかく、絵島事件の情報は娯楽化という味付けのもと絵島生嶋事件に變形され、それ(俗説)がいつの間にか定着して行くことになる。こうして、浮世草子は(結果的に)歌舞伎健全化キャンペーンの一翼を担うことになってしまった。書く、ということはまさにそういう危険な側面を持つことでもあったのだ。

ところで、『西鶴傳授車』には、水木辰之助が一ヶ月前に出た「江島やの役者評判」『役者我身宝』(正徳六年正月)を地獄に持参する場面がある(巻四の二)。また、鱗長もこう書いている。「ふうりうのいきかた、しやれのしこなしなどといふ事は、江島やがむかし八もんじの筆とりて、曲じやみせん時代の風流ものによみおぼへし」(『猿源氏色芝居』巻五の一)と。『風流曲三味線』の作者が其蹟だということとは二年前にはじめて明らかにされた事実である(『役者目利講』)。それが、早速ここに踏まえられているのだ。当時八文字屋と抗争中だった其蹟は、まさに時の人でもあったということが出来るだろう。そんな彼は、絵島事件にどう反応したのであろうか。

#### 四

絵島事件に対し、自笑や其蹟は全く沈黙した。関心がなかったのだろうか。いや、そうでもないようだ。例えば、『役者色茶湯』(江戸)(享保二年正月・八文字屋刊)の発端部。そこには、「去奥がたにつとめまするこいも」と八人とあり、その中に「生嶋」の名が出る。そして「宮づかへの内にも、おとこといふものなふては菜みがない」とまで言わせて、事件を匂わせていたのである。しかし、彼らは書かなかった。なぜか。そこには、いくつかの理由が考えられる。

一は、多忙だった。つまり、事件の発生した正徳四年は、江嶋屋から最初の役者評判記『役者目利講』が出され、そこでの内証暴露から八文字屋との抗争へと

発展していった年である。それゆえ、多忙で事件に関心を寄せる暇がなかったということだ。確かに、これで一応の説明がつく。しかし、逆に考えるなら、抗争に勝つような売れる本を作るためには、これほど恰好な時事的素材はなかった筈である。むしろ、積極的に取り組んでもよかったのではないだろうか。それを阻んだのは何だったのだろうか。

そこで出てくるのが、二の自主規制説だ。今田洋三氏によれば、日本最古の出版統制令は、明暦三（一六五七）年の七月に京都で出されているという（『江戸の禁書』五五頁から五六頁）。因みに、江戸では寛文期（一六六一―一七二一）に、好色本や噂話に対する印刷の制限令が出され（『江戸板本師日記』）、同六年および一二年には山鹿素行と宇都宮由とのが、それぞれ『聖教要約』と『日本人物史』とで筆禍を被っている。綱吉の時代に入り、取締りは本格化する。彼は天和二年の五月にその基本政策を五枚の高札に示したが、その第三札にわざわざ「新作之懺ナラザル書物、商売スベカラザル事」（『正宝事録』）と書いた。この事実、彼が出版の内包する力を強く警戒したことを物語っており、今田洋三氏は「天和の時期は、書物を媒介とした社会的コミュニケーションの展開に、幕府が強い関心を示し、統制強化にのり出した時期」（『同書』六二頁）であると位置づけている。もはや、その社会的影響力を無視することが出来ないまでに書物は広まり、出版活動は肥大しつつあったのである。

此以前も板木屋共江如被仰付、御公儀之儀者不及申、諸人迷惑仕候儀、其外何ニ而も珍敷事を新板に開候ハ、向御番所江其意申上、御差圖受、御意次第ニ可仕候。若隠候而新板候者於有之ハ、御穿鑿之上、急度可被仰付候間、此旨板木屋共町中之者共、少も違背仕間敷候事、（『徳川禁令考』二九三六・延宝元（丑）年五月）

これは家綱時代のものであるが、「御公儀に關してのもの」、「人に迷惑をかけるもの」、「珍奇なもの」という三点に取締りの重点があったことが分る。

綱吉の時代に入っても、同旨の町触が天和四子年四月に「服忌令開板致し候者之儀ニ付町觸」（『同書二九三七』）として出され、徹底が図られる。そして貞享元年一月に至ると、取締りの範囲が小歌や小冊子に迄広げられていく。

町中ニ而むさど仕たる小歌はやり候事、勿論當座之替りたる事故板行、賣候もの有之候、家主致吟味、何方ニ而も左様のもの一切板行仕間敷候、尤辻橋ニ而賣候もの之候ハ、其町ニ而相改、捕候而番所江可申來候、穿鑿之上、賣候ものハ不及申、致板行候者まで、急度可申付候、近日改ニ廻し候間、其旨可相心得もの也。（『同書二九三八』）

同旨の禁令は、元禄一二年二月にも繰り返されており、筆禍者も生む（宮武外骨氏『筆禍史』）。

以上のごとき体制は、其頃の時代に於ても変わらず、正徳三（一七一三）年閏五月六日には、こう補足、強化されている。

町中ニ而むさど仕たる小うた、或ハはやり事、或ハ當座替たる事を板行いたし賣候儀停止之旨、前々相觸候通、彌制禁之事ニ候、勿論當分有之事をやつし令板行、又者狂言等ニも向後堅仕間敷候（『徳川禁令考』二九三九）

注目したいのは、後半部分である。当局は、「當分有之事をやつし」て、出版・上演することさえも禁止するというのだ。〈やつし〉とは、「略し」（『接曾我女時宗』序）であり、「化」（『倭訓栞』）であって、一口で言うなら〈世界〉や登場人物の名を変えなどして素材を変形することだ。『御前義経記』などのように先行文芸をやつしたのも含めて、創作手法としての〈やつし〉が、当時如何に隆盛であったかについては従来度々論じてきたので、深入りはしない。ただ、（第三節で触れたごとく）当時の作家たちにとって、〈やつし〉が当局の取り締りを逃れる、唯一の方法であり、手段であったということだけは確認しておいてよいだろう。いや、その方法にまで手が入ったのである。もちろん、第三節に示した諸作品が無事であったように、右の禁令によって筆禍を受けた作品がどの程度あったのか、それは分らない。しかし、作者や書肆たちの注意を喚起し、自主規制を促す効果は充分にあったとは言えるのではないだろうか。

本屋仲間の相互監視制度に基づく自主規制。吉宗時代の出版取締政策は、これが柱となる。そうした政策に添って当局は正徳六（享保元）年の京都、享保六年の江戸、同八年の大坂と、相次いで本屋仲間や行司制度を認め、出版物の監



視に当らせる(詩田穠城氏『京阪書籍商史』)。『京都市上組済帳標目』(『京都書林仲間記録』)というのは、そうした書林仲間の記録であるが、注目したいのは、その享保三年(五月頃より後)の記事に、江嶋屋の『忠臣蔵太平記』(正徳二年秋以前刊)が「絶板被為仰付仲間売買不仕」四書の一として記録されていることだ。すなわち其磧も筆禍をうけているのである。この点については、後節で触れるとして、ここではともかく、其磧や八文字屋がそうした自主規制の圈内にあったということだけを確認しておきたい。

なるほど、其磧や八文字屋が絵島事件に沈黙した理由は、右の自主規制説で充分説明し得るかも知れない。しかし、それではなぜ、一風らの諸作が無事と分った後も書こうとしなかったのか。

二が自主規制という名の「消極的沈黙」とするなら、三は、いわば、「積極的沈黙」説である。ここで考えたいのは、事件当初、其磧らにどの程度の情報が届いていたのかということだ。芝居通であり、役者評判記を執筆する都合上からも、彼らが常に江戸の芝居関係者と情報の交換をしていたであろうことは容易に想像出来る。そして、その情報は、速さ、量、質(正確さ)のどれをとっても、『月堂見聞集』に記録されたものの比ではないことも確かであろう。そうした、膨大な情報を分析しながら、彼らは事件の本質を正確に感知したのではなかったろうか。そして、事件の真の犠牲者は、むしろ生嶋新五郎ら芝居関係者であるということも確信した。何とか弁護したい。しかし、「実録」と称して、真相を書けるような環境ではない。また、浮世草子化(娯楽化)すれば、読者の興味をそそるためにどうしても生嶋新五郎を事件の主役の位置に据えねばならなくなり、当局の目論見通り、絵島生嶋事件になってしまう。それは、『今源氏空船』や『西鶴傳授車』の例を見ても明らかだ。それでは、芝居関係者に多くの知己を持ち、芝居を誰よりも愛する其磧らの本意に背くことになる。また、実利的な面から言っても、ここで歌舞伎界が打撃を受ければ、絵入狂言本や役者評判記の売れ行きにも当然響いてくるだろうし、歌舞伎と運命共同体というべき自分たちの被害も大きいのである。以上のような思わくで、積極的に沈黙したのではなかったろうか。

つまり、沈黙することが、当時の彼らの取り得る唯一の表現方法であり、抵抗の手段だったような気がするのである。

以上、絵島事件を基本軸としながら、其磧や八文字屋がそれに沈黙した意味を問い、正徳の後半から享保初期という時代を私なりに考えてみた。こうした時代を背景に、其磧がどのような活動を続けて行っただかについては、既に享保八年までたどったので繰り返さない(「抗争期の其磧」『近世文芸』三四号・「抗争後の其磧」『弘前学院大学紀要』二二二号)。

次節では、再び年譜に空白が見えてくる享保九・一〇年の其磧について考えてみよう。

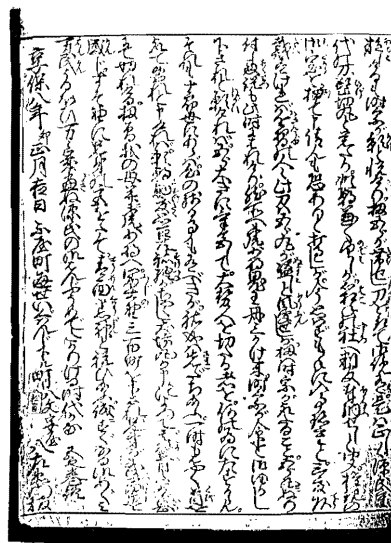
## 五

享保九、一〇の二年間、八文字屋から其磧の浮世草子は一作も出ていない。享保五年の四編(菊屋などから出された『花実義経記』を含めると五編)は特別としても、享保三年の和解以来これまで年平均二冊は出して来たことを想起するなら、異常とも言うべき空白である。

この辺の事情について、長谷川強氏はこう考証している。つまり、享保六年顔見世の絵入狂言本『大和歌伝授富蔵』に八文字屋が鶴屋や正本屋に接近する兆が見える。一方、其磧は『商人家職訓』を谷村から出している。これは、享保六年末から七年にかけて「八文字屋と其磧の不協和」が生じていたことの証ではないか。そして、その背景としては、「当時歌舞伎界は人気下降期にあり評判記の売行減少といふやうな事」があったのではないかと『浮世草子の研究』三二二頁から三二三頁。歌舞伎の不振に、先述の絵島事件や、その後の健全化運動がどの程度影を落していたのか。それは分らない。しかし、其磧や八文字屋の恐れていた事態が現実化したのは確かなのである。こう考えて来ると、享保九、一〇という二年間の空白には意味があった。そのころ、何かが起ったのだ。それは、其磧と八文字屋の良好な関係を揺さぶるようなものであり、江嶋屋を解散に追い込むほどの大きな事件であったことは疑いない。なるほど、その背景には長谷川氏が指摘



『桜曾我女時宗』(巻二末・付載広告)



『桜曾我女時宗』(刊記)

する如く、歌舞伎不振による八文字屋の業績悪化というようなことがあったのかも知れない。しかし、それだけだろうか。

この点を考えるにあたり、示唆深いのは、享保八年正月刊の『桜曾我女時宗』が『禁書日録』(絶板の部)に載る一方で、寛保以降の八文字屋蔵板日録にも登載されていないという事実だ(長谷川強氏『浮世草子考証年表』九六頁)。

『桜曾我女時宗』をめぐる、なんらかのトラブル。それが、右の空白に関係していないだろうか。

『桜曾我女時宗』

(東北大学狩野文庫蔵・4・門11700)を検討してみると、興味深い幾つかの事実を見出すことが出来る。それは八文字屋の単独板でありながら、江嶋屋との相板の広告(巻二末)を掲載していることである。

『桜曾我女時宗』は何らかの事情があつて八文字屋単独で出した。しかし、広告に示した五作品は従来通り江嶋屋との相板で行こうとしていたようなのだ。だが、管見に入つた三作品(『寝紫伽羅枕』<sup>名取川藩家達初川は『未見』</sup>の刊記には、八文字屋の名しか刻されていないのである。この事実は何を物語るのであろうか。刊行が享保一七年三月にまでずれ込んだ『けいせい哥三味線』は、当面措こう。広告に載る、残りの二作品を検討し空白の原因に迫ってみよう。

『百人女郎品定』も『桜曾我女時宗』と同じように『禁書日録』(絶板の部)に載っている。なぜ禁書となつたのか。その理由について、馬場文耕は『江戸著聞集』(巻一一)の中でこう書いている。

(英一蝶)は百人女郎と云ふ繪を書きて、世に流布しけり。其繪は貴人高位の女郎より、賤の女まで、其頭名高き麗しき女の姿を寫しけり。其中におでんの方(引用者註・網吉最愛の女性という)、船中に鼓打ちてまします姿繪、公の棹さし給ふ有様まで、さも美しく畫きたりけり。此事、誰有りて公儀へ訴へしか、奉行頭人の御耳へ入りにて、彼を忍び召捕はれ、窄舎仰付けられ、終に遠島に仰出されけり

と。また言う、

此一蝶が、百人女郎の繪ともを本として、其後、洛陽西川祐信といへる浮世繪師、好色本枕繪の達人といはれしが、或年、百人女郎品定と云ふ、大内の隠し事を畫き、其後、夫婦契りが岡と云ふ枕繪を板木にして、雲の上人の姿をつがひ繪に圖し、やんことなき方々の枕席、密通の體を模様して、清涼殿の妻隠れ、利壺のかくし妻、萩の戸樞のわかれ路、夜御殿の妻むかへと、いろ／＼の玉だれの中の、隠し事を畫きしに因りて、終に公廳に達して、是亦と厳き御咎にて、板を取られ絶板しけりとかや。是世人の多く知る所なり。其後、好色本禁ぜられ、賣買を止め給ひし

と。もちろん、この記述を全面的に信用することは出来ない。ただ、看過できない内容を含んでいることは確かだ。因みに、『夫婦契りが岡』という本は、正徳

四年に出た祐信の三冊本『夫婦双が岡』（『日本艶本目録』）の姉妹作であると思うが、問題はそこに言う『百人女蔵品定』が、『桜曾我女時宗』に広告されたものと同一本か否かということである。この記録を紹介した宮武外骨は、『百人女蔵品定』を「マジメなる繪本『百人女郎品定』なるべし」として両書を同一本と見なした。そして、文耕の記述を「（祐信が）春畫の妙手なりと云ふに附會せし説ならん乎」として、「見て來たやうな嘘」と決めつけた。また、絶板の理由を考証して言う、「至尊高貴の方々を賤しき賣女等と共に畫並べたるは上を畏敬せざる仕業なりとて、公家より絶版を命ぜられたるならん」（『筆稿史』四九頁から五〇頁）と。はたして、そうか。因みに、『百人女郎品定』（現存本）は祐信の繪を中心とした風俗繪本で、上下各五〇人、「女帝」から「惣嫁」に至る女性の様々な職業・生態を簡潔な説明を添えて書いたものである。刺激的な書名とは対照的に繪は極めて穏やかで、枕繪の名手でもある祐信のものとしては、むしろ拍子抜けの感さえ与える。説明の調子も低く「国御前」など問題となりそうな部分でも、こうである。

諸侯ハ勅命によつて、敵國を制するゆへに、妻をめしつるゝもあり。木曾義仲の巴、山吹を召つれしたぐい也。又國の妾とあがめたつとひて、國御前ともいふ。

もちろん「大内の隠し事」など、どこにも見い出せない。また、外骨が絶板の理由とした「高貴の方々」と「賤しき賣女」を同一組上に配するという趣向は、『好色訓蒙図彙』（貞享三年三月）の「女道濡界」など、より露骨なものが他に幾らでもあり、理由付けとしては甚だ弱いと言わざるを得ない。

私は、絶板処分を受けたのは、現存のものとは別の本でないかと思う。絶板にしては伝本が多すぎるのも理由の一つであるが、何よりも次の広告が気になるからである。

并ニ花著育の息女は附子の驚笛  
百人女郎品定 全部五卷  
付り風流造の遊女は實生の禿菊

右は一切女中の風俗有識世俗故事因縁當世古風のわかちを文談仕り、尤さしあいなし西川筆ニ而御たしなみ草紙にいたし追付出し申へおしらせのため書印申候  
（正徳六年正月『役者願組解』大坂の巻末）

注目したいのは、そこに「全部五卷」とあることだ。因みに現存本は、二巻二冊。もちろん、これは早い時期の広告であり、同時期に出た『分里艶行脚』付載の広告に巻数が記載されていないことを考慮するなら、その段階で構想は充分に煮つまつてはおらず、その後二巻に縮少されたと考えられないこともない。しかし、先掲の既刊（六六頁）広告にも巻数の表示はないのだ。とすれば、そこで言う「既刊が現存の二巻本を意味しているとは限らないし」、「五巻」という最初の構想がそのまま引き継がれ、五巻本として刊行に至ったと考えてもおかしくはない筈だ。「五巻」という広告にこだわるのには理由がある。それは繪本としては少量が多過ぎるからである。五巻というのはむしろ浮世草子に相応しい。こうした様々な疑問を踏まえて私は、次のような仮説を持っている。つまり、広告したもの、祐信の仕事の遅れもあり、『百人女郎品定』の刊行は延引した。そのうち、享保三年に其蹟との和解が成る。その其蹟は、『魂膽色遊懷男』（正徳二年）や『女男色遊』（同四年）などで、大名の息女の秘部などを暴いて好評を博していた。そんなことから、八文字屋の構想はむしろ拡大されることになる。つまり、「大内の隠し事」を祐信の繪と、其蹟の文で暴かせる企画へと動いて行ったのではなかったろうか。こうして、『百人女郎品定』は享保八年の正月に、五巻本として出た。しかし、そうした本が許されるほど、時代は甘くなかった。

『月堂見聞集』（卷二）は、享保五年の八月一八・二四日に『色傳受』、『太平義臣傳』が相次いで絶板となったことを伝える。当局の日は、「書籍假名草紙ニ至迄」（『徳川禁書考』卷五・二九四）光っていたのだ。そして、それはあまりにも有名な享保七年一月の「新板書物之儀ニ付町觸」へと収斂して、出版物に対する取締り体制が確立して行くこととなる。時はまさに、禁令の時代へとひた走っていたのである。そうした環境のもと、『百人女郎品定』は絶板処分をうける（二巻本への再編は、この直後に成されたものではなかったか）。

この事件が、其磧や八文字屋にどの程度の打撃を与えたのか。それは分らない。ただ、この事件を境に、彼らが自主規制を強め、より穏健な路線を志向するようになったらうことは、充分に想像し得るのである。

## 六

何とも分らないのが、『風流七小町』の既刊広告(享保八年正月二日刊)である。

周知の如く、この作品の初板は享保七年九月に出ており、四ヶ月足らずの間に再板されたことになる。この点についても、長谷川強氏の興味深い示唆がある。

再印に及んだ事情は明らかでないが、本書は寛保以降の八文字屋の蔵板目録に見えず、前項の「桜曾我」が絶板になってゐるのと同じやうな事情、萩野八重桐の上演狂言に關したトラブルが何かあったのではないかと思ふ(『浮世草子考証年表』宝永以降)「九七頁」。

「八重桐の上演狂言に關したトラブル」とは何か。八重桐については、井上伸子氏の詳細な研究(『初代萩野八重桐とその時代の女方』『近世文芸』三五号)があるが、その点についての言及はなく、何とも思い浮かばない。ただ、八重桐という役者が、極めて謎の多い人物であるということは言える。ともかく、彼を追つてみよう。

最初に直面するのが彼は萩野八重桐なのか萩野八重桐なのかという初步的な問題である。つまり、享保二年四月『野傾髪透油』(八文字屋刊)までは萩野の表記が多く(正徳六年『役者我身宝』のみ萩野とする)、享保四年正月の『役者金化粧』以降の評判記は、すべて萩野としている。とりあえず八重桐とだけ呼ぼう。さて、元禄一四(一七〇二)年に大坂岩井半四郎座「若女形」として登場した彼は(『役者略譜状』、和甚の指導で腕を上げ、宝永二(一七〇五)年暮から江戸山村座に下る(『役者我身宝』)。宝永五年には大坂嵐三十郎座に入り(『役者胎内搜』)、翌年から座本を勤め、上方を代表する若女形として、芳澤あやめと人気を二分した。だが、ここまで順調に來た彼であったが、正徳の末から享保初年の二、三年間に何か起つたらしい。つまり、正徳五(一七一五)年正月に八文字屋の出した『役者懷

世帯』(大坂)は八重桐を若女形の「上上吉」として載せるが、同時期に出た江嶋屋の『役者返魂香』には彼の名がない。また、『役者懷世帯』にしても、若女形の巻頭を八重桐にするか、袖崎哥流にするかで迷いが見え、八重桐に対する評判は歯切れが悪いのである。翌正徳六年正月は、「御病氣分にて御休み」(『役者我身宝』)であり、八文字屋の『役者願組解』にも載らず、同年四月に至り、沢村長十郎座「極上上吉」若女形の巻頭によく復活する。また、享保三(一七一八)年正月八文字屋刊の『役者三幅對』(大坂)では、「萩野」・「萩野」二種の表記が混在し、「近日より顔見せ仕り候とかんばん出し有。此座のいわく、おくニ有」(目録)として、「いわく」があつて八重桐座が休座だったことを明かしている。しかし、「おく」からも、「いわく」について充分な説明は得られない。ただ、翌年から彼が京の大和山座に居ることや、これ以後、萩野に表記が統一すること等を考えるとその「いわく」が大きな意味を有しているやうな氣もするのだ。因みに、彼は享保六年の春、京都にて再び座本となり、同一〇年の中途に座本を仕舞う(『歌舞伎年表』)。元禄一五年に京に上つた時が一八歳というのを信じれば(『役者舞臺小袖』、当時四一歳。「其うつくしきさどふもいはれず」(享保二年三月『役者幸相撲』)とは評されても、それは慈童の故事を引き合いにしての褒詞である。若女形は年齢的にも限界だったのかも知れないし、「いわく」は病氣や年齢のことだったとも考えられるだろう。実際、その後の彼は、大津、京都(『役者幸相撲』)と動きが激しくなり、桜橋、伊勢、大坂(『役者遊見始』)、再び京都、平野、名古屋と動き、元文元(一七三六)年正月の『役者福若志』(京)に「若女形」「極上々吉」とあるのを最後に消える(『歌舞伎年表』)。しかし、一方では「ばくがた」(『役者遊見始』)ともいふべき年齢で若女形を勤めた芳澤あやめの例もないわけではないのだ。となれば、八重桐が享保一〇年の途中で座本をやめたことにも、何か身体的理由以外のいわくがありそうだ。

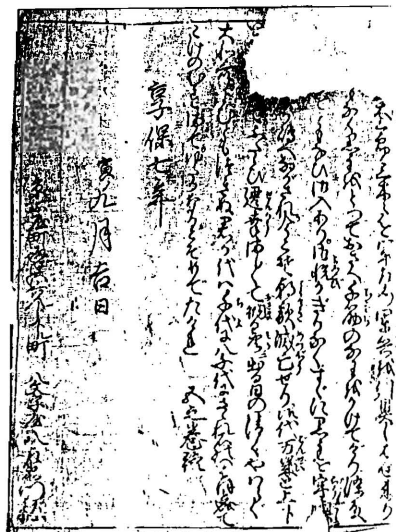
八重桐の絶頂期は、京都ではいや座の座本となつた享保六年からの四年余とみてよいだろう。その時、彼は古今にない「女形の立役」として、『女正門七人化粧』(享保六年)、『桜曾我女時宗』(同七年春)、『けいせい七小町』(同年秋)などを

演じ分け、「大あて」(『役者春空酒』)をとっていた。其磧もそんな八重桐人氣に乗じて浮世草子を書いた。それが、当面の問題である『桜曾我女時宗』や、『風流七小町』であり、享保一二年正月にまで刊行のずれ込んだ『女将門七人化粧』である。そういった意味で、享保七、八年ころの其磧は八重桐と密接に関係を持ち、彼によって創作意欲を喚起されていたと言っても過言ではないだろう。注目すべきは、八重桐の下降期と其磧浮世草子の空白期とが重なることである。単なる偶然だろうか。それとも、やはり八重桐のいわくが其磧にまで影響を与えているのだろうか。その点を次節で探ってみることにする。

その前に、もう一つ片付けておかなければならない問題がある。それは、八重桐について考える契機となった、『風流七小町』の再板についてだ。既述の如く、長谷川氏はそれを八重桐と絡めて考えていた。しかし、私は再板に関しては、八重桐の問題は無関係のような気がしている。ともかく、考察してみよう。

ここで、西尾市立図書館(岩瀬文庫)にある、『風流七小町』の刊記を見ておこう。

これが初板であるが、ここで気になるのは、日付と板元名の間にある大きな空白だ。つまり、この空白は、そこに江嶋屋の名を入れることが充分な空白なのだ。これと、全く対照的なのが、『桜曾我女時宗』(先掲六六頁)の刊記である。こ



(『風流七小町』刊記)

の窮屈さは、どうであらうか。もちろん、こんな例が他にないわけでもないし、八文字屋の名しか入らぬよう意図的に操作したと強弁するつもりもない。ただ、以上の現象からは、次のような仮説も可能

なのである。つまり、享保七年頃八文字屋は其磧を専属作家として抱え込みつつも、江嶋屋との提携は解消したいと考えていた。なぜなら、当時の江嶋屋は既に本屋としての実体を成さず、本屋仲間の「お荷物」と成りつつあったからである。例えば、享保三年五月には、赤穂物に対する一連の禁令に伴い、『忠臣蔵太平記』(正徳二年刊)が「絶板」を命ぜられているし(既述)、『けいせい傳受紙子』の本文に手が入れられているのも、本屋仲間の指導に従ったものと考えられないことはない。また、相板とはいえ、板本はおそらく八文字屋が所有していて江嶋屋は単に其磧の権益を守るためだけにのみ存在していたものと思われる。いずれにせよ、そんな思わくを抱いた八文字屋に、好都合の事態が出現する。享保七年正月、其磧は「互の作は外へ出すまい」(『役者三蓋笠』)という約束を破って、谷村清兵衛方から『商人家職訓』を出したのだ。そうした其磧の弱みに乗じた八文字屋は、江嶋屋を加えず、単独で『風流七小町』を出すことにした。おそらく、この作品は『桜曾我女時宗』などと共に享保八年の正月に出すつもりでおり、其磧とも約束が出来ていて、行司にもその線で報告していたのではなかったろうか。浮世草子は正月に出すという恒例を破ってまで、刊行を四ヶ月程早めたのは、其磧の不実に対する報復もさることながら、江嶋屋切り捨てへ向けての実験的出版という狙いがあったからではなかったろうか。もちろん江嶋屋からの抗議や、それに伴う本屋仲間の仲裁は承知の上だ。最悪の場合、例の「空白」に江嶋屋の名を入木して、正月に正式に上梓すればよいと考えていた。案の上、其磧からの抗議はあったが、既に江嶋屋経営に情熱を失っていた彼の姿勢は強硬でなく、「五冊ものは拾両」(『白鷺洲』)というような形で原稿料を前払いすることで治まったのではなかったろうか。こうして、『風流七小町』は正式に、翌八年の正月に出される。ただ、当面はその線で解決したものの、江嶋屋は依然として存在しているし、其磧も完全に納得した訳ではない。そんな点で、含みを持たせ江嶋屋の名を加えたのが、例の広告(六六頁)だったのではないだろうか。つまり、相板の広告は、未刊の『けいせい哥三味線』にのみ、作用していると考えられるのである。しかし、江嶋屋は、同年三月の『役者頼振舞』を最後に消え、『けいせい哥

三味線」も大幅に遅れて享保一七年の三月に、八文字屋単独で出すことになる。

# 七

八重桐のいわくとは何か。「櫻曾我女時宗は、是八重殿の金蔵いづかたにても大あたり」(享保二〇年正月『役者初子讀』)という如く、この狂言が関係していることは確かだろう。しかし、それだけだろうか。『月堂見聞集』(巻一五)は、享保八年六月一日、町代からの「觸」として次のような記録を残している。

一、町々にて大塔宮囃の鑑、智略の萬歳と中繪岡川候義、無用に可仕候旨被仰付候、此旨町内銘々へ可被申聞候。已上

私に云、右之繪岡之文語、徳若に御萬歳と、御代もさかへまします、是はきやうがる有さまや、とき立歸るあしたまで、みつ／＼はなしきしつをさぐり、たづねんと思ふはめでたふさふらひける、むかしの京はなんばの京、中ごろはならの京、今の京と申すはよろ、つよこしまで、あの御天子をはふからず、我まはたらくたいらの京、京のしをきは關東まかせ、宮方ひづめ公家衆たをし、百姓せたり町人いじり、民はきづちりく、(傍点引用考)まことにむねにさふらひけると、とひかくる、已上

『太平記 大塔宮囃鑑』(近松添削 網目 大塔宮囃鑑) (竹田出雲・松田和吉作)は享保八年二月一日竹本座で上演された(『義太夫年表』)。その初段「つはもの萬歳」に、右の「是は」以下の詞章が載っている。その文を添えた一枚摺の芝居絵『大塔宮囃の鑑・智略の萬歳』が京の町に流行したというのだ。確かに、右の詞章を浄瑠璃の文脈から切り離し、独立させた時、傍点部に込めた「棘」は『享保世話』のそれを彷彿させるほど強烈になってくる。当局が取り締まりに乗り出したのも当然といえよう。問題は、この「觸」の出された直後の七月、京の八重桐座で『大塔宮囃鑑』を敢然と上演していることだ(『歌舞伎年表』)。このことに対して当局がどう反応したのか。それは分らない。しかし、十月に「四條芝居者の儀、當顔見せより、絹衣服用候事停止」(『月堂見聞集』一六)というような禁令を出す厳しい姿勢から判断するに、あまり快く思っていなかったことだけは確かなようだ。

もちろん、この一事が、八重桐のいわくに直結するとは言いい切れない。しか

し、そこに見られる八重桐の反骨的姿勢は、いわくを招来するような危険さを充分に孕んでいたとは言えるだろう。

多少の異論を含むとしても、八重桐の歌舞伎史上に占める位置を、「(女形の)芸域を広げ、立役の芸を吸収し、新趣向を開拓した」(井上伸子氏・前掲書・二七頁)点に求めるのは正しいであろう。其積は、そんな八重桐の前衛的姿勢に創作意欲を喚起され、彼を支援するような気分です浮世草子を作った。それが先述の三作『櫻曾我女時宗』『風流七小町』『女将門七人化粧』であるが、私は『太平記』(享保一七年正月刊)も、八重桐の『大塔宮囃鑑』に喚起されたものと考えている。問題は、その刊行時期の遅れである。『風流七小町』や『櫻曾我女時宗』も、そうであるが、『桶三代壮士』(享保五年正月)、『日本契情始』(享保六年三月刊)など当時人気を博していた歌舞伎や浄瑠璃に取材した作品は、それらが上演された時期の一年以内に出版するのを常としていた。そのことを考えると、『太平記』の九年後というのは異常に遅い。同じことが、上演の六年後に出了『女将門七人化粧』についてもいえる。両書が共に八重桐の歌舞伎に関係した作品であるということを見ると、一つの仮説が成り立つ。それは、八重桐に対して当局が警告するようなことがあったのではないかということである。それに連動する形で、『櫻曾我女時宗』が絶版処分を受け、『風流七小町』の板木も没収された(八文字屋の蔵板目録に載らない理由はそのため)。そういったことを踏まえて、同じ八重桐のものである『女将門七人化粧』と『太平記』は上梓を見合わせていたのではなからうか。つまり、両書の六年と九年という異常に長い時間は、冷却を待つ期間だったと考えるのである。この仮説に対しては、こんな反論が出るであろう。それでは、八重桐に対する当局の警告が、なぜ役者評判記など芝居関係書に残っていないのだと。なるほど、もっともである。しかし、それでは、絵島事件について芝居関係者は何か書いていたのだろうか。生嶋新五郎に対する処分が、当時の役者評判記に載っていたのだろうか。こういった場合、沈黙することが、共通の、そしてお決まりの態度だった筈である。

第六節で考察した如く、享保一〇年の中途で座本を仕舞った八重桐のその後

は、あまり恵まれたものではなかったようだ。八重桐の退転、なるほどその後も京や大坂の舞台を踏んでいることを考えるなら、それは言い過ぎかも知れない。しかし、享保一〇年以降の彼が盛時の輝きとパワーを失っていたことは否定できないのではないだろうか。因みに享保一一年正月刊『役者正月詞』は佐野川万菊を評して、「八重桐殿の上をのりこへ給ふ」と書いている。

そんな八重桐に、其蹟も歩調を合わせた。すなわち、享保一一年以降の彼は歌舞伎に傾いていた従来の路線を変更し、専ら浄瑠璃へと傾斜を強めて行くことになる。もちろん、其蹟がそういう姿勢をとったのは八重桐のことだけが理由ではない。歌舞伎の不人気に対し浄瑠璃人気が高かったこと、院本を使えば創作が容易なことなど他に様々な要素が絡んでいる。しかし、私は其蹟の心の片隅に八重桐に殉ずる気持があったような気がしてならないのだ。

以上、其蹟年譜に見られる沈黙と空白、そんなホワイトスペースを勝手気ままに読み込んでみた次第である。推測ばかりで組み立てられた本稿は、謬見に満ち、書いてないものを読もうとしたという点で、非学問的かも知れない。ただ、彼の生きた時代が必ずしも開かれた時代ではなかったということを考慮するなら、彼の〈沈黙〉や〈空白〉に積極的意味を読み込もうとすることも必要な気がするが如何であらうか。其蹟にとつての沈黙とは、時代を表現する方法の一つでもあったのである。

## 註

一 綱吉時代の影の部分に着目し、西鶴浮世草子の新しい読み方を示したのは野間光辰氏（『西鶴と西鶴以後』『西鶴新解釈』）であるが、尾形仇氏も『大方丈記』を用いて芭蕉における蕉風の展開を別な角度から考察し、秀れた成果を挙げた（『蕉風への展開』『国語と国文学』昭和三二年四月）。

二 享保一七（一七三二）年から、寛延三（一七五〇）年までの人口調査。なお、この点については、既に奈良本辰也氏の指摘がある（中央公論社『日本の歴史8』）。

三 「絵島」の表記は、「絵島」（『有章院殿御実紀』『絵島罪断事考』など）とも「絵嶋」・「江島」・「江嶋」（『江島實記』『月堂見聞集』）ともあり、一書の中での混用も多く、定まらない。以下、便宜上公的記録の『有章院殿御実紀』に従い、「絵島」に統一する。

また、「生嶋」・「生島」という二通りの表記のある生嶋新五郎も生嶋で統一した。

四 奈良本辰也氏「絵島疑獄」（『日本の歴史8』）。

五 陣峻康隆氏は「沈黙」の原因についてこう書いている。「この事件は芝居道の不祥事であった為に、江戸時代には演劇化されず、明治十六年に至って三代目河竹新七が初めて『浪華江島新語』を書いてゐる」（『江戸文学辞典』・一三四頁）と。

六 十団子については、森川許六の「十団子も小粒に成ぬ秋の風」が名高いが、この句については大高洋司氏の秀れた考察がある（『十団子』考、『飲食史林』第四号）。その中で氏は、十団子はかなり早い段階から食用ではなかったということを詳細に立証し、頼原退蔵氏（『名句評釈』上）の「寂しい山里まで、世智辛い浮世の波はよせて来る」という従来の名釈に異議を唱えた。

七 『役者我身宝』には江嶋屋の他、鶴屋喜右衛門と正本屋九兵衛が板元として名を連ねている。なお、同時期に八文字屋からは『役者頼紐解』が出ており、水木辰之助にはどちらの本を持参してもよかったにも拘らず『役者我身宝』を持参させたのは、『西鶴傳授車』の板元（村上宗吉）の反八文字屋の心情を物語るかのように興味深い。

八 但し、「触（條々）」に付せられた日付は、「二月廿九日」となっている。

九 拙稿「やつし放——都の錦の蹉跌」『緑岡詞林（第一号）』・同「傳受紙子臆断語」『青山語文』（第六号）・同「抗争期の其蹟」『近世文芸』（三四号）など。

一〇 『禁書目録』の概要を以下紹介する。

東京大学附属総合図書館蔵（A10/408）（外題・柱刻も同）板本。半紙本（22×16.0全一七丁。九行。刊記は「明和八歳辛卯仲夏日京師書林印行」とあり、序は次の通り。

禁書目録 序

古来御制禁之唐本、和書、并ニ絶板売買信心之書、其外秘録、浮説等々、写本好色本之類ハ片紙、小冊たりといへともかりにも取扱ふへからず。常々相傾、堅く法令を相守るべき旨、毎歳正五九月書肆参集の朝、ねんころに是を戒めおくといへとも、書目数多の事なれハ、一々記題しかたく、或ハ忘却し、或ハ意得たかひも是あるへし。

依之今般右之書目、古来より傳聞記録する所、大抵其類を分てこれを記し、印刷して小冊となし、書肆我々ニ（序オ）附与し、人々常にこれを照覧候して、いさゝか疎略之誤りなからん事を願ふもの也。然りとていへとも述作の限なき見聞の廣からざる此書の載する所、或ハ遺脱過誤あらんも計りかたし。是を覧る人、其遺たるを補ひ、誤れるを正したまはん事ひとへに是を冀ふもの也。

明和八年辛卯五月 京師書林

式組  
行司

以下、「貞享乙丑年南京船持渡唐本國禁耶蘇書」、「書本」、「絶板之部」、「賣買停止并仲間裁配」、「素人板并他國板賣斷有之部」の五部に分け、それぞれに具体的な書名が挙げられている。

まず、「耶蘇世」は次の三八部である。

『天學初階』『幾河源本』『職方外記』『萬物真原』『彌撒教義』『聖記百言』『唐景教碑附』『簡平儀説記』『西學風』『代疑編』『同文算指』『十愆』『表度説』『靈言龜勺』『渾蓋通憲門記』『藏罪正記』『商人』『天文秘畧』『天主美義』『同統』『計開』『參泰西水法』『二十五言』『明量法義』『七克』『辨學遺編』『三山論學記』『園容教義』『勺股義』『交友論』『教要解畧』『況義』『條平儀記』『奇々圖説』『福建通志』『寶有詮』『圯緯』『陽邪集』

但し、一説には、※印の四品を除き、「門記図説』『帝京景物畧』を加えての三大部ともいう。

つづいて、「書本」の部のリストを掲げる。

『先代旧事本紀』『本朝通鑑』『萬天実録』『文露叢』『柳菴秘鑑』『同統』『武德大成』『御年譜』『玉露叢』『寛明日記』『甘露叢』『東家日録』『日本中興治乱記』『異考大通記』『武臣実録』『扶桑見聞私録』『御年譜附尾』『同泰政録』『難波戰記數品』『浪華軍記』『豊臣記』『新撰豊臣実録』『嶋原記』『秀頼事記』『武德安民記』『国史実録』『武家盛衰記』『東照創業記考異』『松平記』『松平系図』『御当系図』『三河記』『同貞字』『天草一戦記』『慶長記』『関原記』『同大全』『慶元通鑑』『関原雜話』『岡崎物語』『日光郡郷枕』『松平開闢開運録』『玉の隠顯』『家忠日記』『大坂記』『三河後風土記』『越後連夜物語』『同侍顯記』『駿府政事記』『由井根元記』『由井実録』『德河記』『慶長治乱記』『東照宮御遺訓』『的露叢』『龜卜書』『主圖合結』『東照宮御縁起』『武辺咄開書』『赤城盟伝』『西山紀聞』『介石記』『同追加』『赤城紀談』『義子文通』『介渡記』『新撰大石記』『赤穂忠臣記』『寺灯私記』『蓬窓紀談』『復讐物語』『瑞光院記』『義士考』『寺坂之覚書』『忠士絶筆書』『忠義碑文』『慶元冬夏軍記』『忠士筆記』『露適集』『鍾秀記』『義人録』『權華集』『武家明鏡集』『易水連袂集』『山科之聞書』『膽心精義伝』『岩淵物語』『天寛日記』『中興統盛衰記』『武家拾要記』『難波戰記後篇』『慶安太平記』『武家嚴訓録』『仙台秋』『秋田杉』『武家隠見記』『諸家大秘録』『明和石曲傳』『阿淡夢物語數品』『浮田物語』『見語大朋撰』『松山実録』『殺法轉輪』『山鳥記』『嶋原實録』『政要実録』『郡上騒動』『嚴秘録』『落穂集』『越後騒動』『切支丹実記』『西山遺事』『姫路騒動』『明和飛日記』『山内幸内一名風呂敷包』『井伊家伝記』『板倉政要実録』『嚴秘此比喩』『三壺集』『宇津宮金清水』『本朝色録』『望遠雜録』

合計、一二三編。内容の分らないものも多いが、その目安については、次のような注意書きが付いている。

右載たる所の外、聞書雜録等之写本數多これ有へしといへとも、一々記すに暇あらず。すべて禁庭將軍家の御事へいふに及はず、堂上方家武家方近來之事を記したる書は右目錄にのせすといへとも、堅く取扱ふへからず。其外世上浮説にても書纂よろしからざる書、是亦右に准すへし。此段人々よくく勘弁あるへき事也。

「絶板之部」には、次の五二部が載る。

『先代舊事本紀簡字板』『同板本』『禮綱本紀』『聖德太子五憲法』『同頭書』『聖皇本紀』『天王寺法夏記』『案内者』『口次紀事』『石田軍記』『東國太平記』『日本人物史』『九州記』『神宮秘傳問答』『辨天秘訣』『五帖目御文章』『同半紙平かな』『百人女郎品定』『櫻

曾我女時宗』『色傳受』『野呂口三味線』『天満宮傳記』『辺鄙以知吾』『耳香きそひ日記』『太平義臣傳』『忠義太平記大全』『忠臣略太平記』『高名太平記』『太平義臣記』『六祖檀經紙語』『好色本孝保八年停止』『新撰春経』『茶經字實寶鑑』『將基勇士鑑』『同手段草』『十種香略部山』『死田山分言』『至公訓』『温知政要』『三部経挑漢師改点』『倭文選廢草』『建武年中行事略解』『忠臣金短冊』『金銀割合重寶記』『徂徠先生可成談』『半紙本』『夜園繪』『精忠傳』『大堂會使蒙』『斥非扁半紙本ノ方』『本迹寄訪』『卿書十體千字文』『唐詩國字介』

「實買停止并仲間裁配」というのは、自主規制というよりは、本屋仲間同士のトラブルを意味するのであろうか。ここには八作品が提示されている。

『笑今川』『風流東海硯』『都獨案内』『花柳嚴柳嶋』『歌曲色紙山』『絵本此手柏』『福引宝繪合』『同役者談合』

最後は、「素人板并他國板賣買斷有之部」で以下の通り。

『大般若経縁起板』『花道全書』『正信傳文航』『指要鈔選翼』『野山名鑑集』『天時占候』『温古秘録』『唐詩選』『唐詩句解』『唐詩選堂故』『同辨書律時排絶句』『同解篇』『四家稿』『易古註江戸板』『詩經古語江戸板』『増註孔子家語江戸板』『楚辭王註江戸板』

一「徳川禁父考」(二九四二)によれば次の通り。「御触書寛保集成」も同じ。

一 自今新板書物之儀、儒書仏書神書醫書歌書、都而書物類其筋一通り之事者格別、狼り成儀異説等を取交、作出シ候儀堅可為無用事、一唯今迄有來候板行物之内、好色本之類へ、風俗之為ニも不宜儀ニ候間、段々相改、絶板可申付候事、一人之家筋先祖之事杯を、彼是相連之儀共新作之書物ニ書顯シ、世上致流布候儀有之候、右之段自今御停止候、若右之類有之、其子孫より於訴出へ、急度吟味有之管ニ候事、一何書物よらず、此後新板之物作者并板元実名奥書為致可申事、一権現様之御儀者勿論、物而御当家之御事板行書キ本目今無用ニ可仕候、無廻子細も有之へ、奉行所江訴出、差図請可申候事、右之趣を以、自今新作之書物出候共、遂吟味、可致寛買候、若右定ニ背キ候者有之へ、奉行所江可訴出候、經數年相知候共、其板元之間屋共江急度可申付候、仲間致吟味、違犯無之様可相心得候、

二「けいせい傳受紙子」には二板あり、両板の異同は、細部も含めると百近い。その中でも特に目立つのは、初板に「されば高貞帥直兩家あへなく亡びし發り」とある傍点部分が、「誠に「国の主」と書き換えた卷五の五(41才・12行目)である(拙稿「傳受紙子斷斷」『青山語文』六号)。もはや、事件を『太平記』の八世界√にやつすことは定形化し、高貞・浅野・師直も吉良という連想が利き過ぎ、「亡びし」という行文に続けるのは危いと考えたためだろうか。

三 もろろん、八重桐の「大塔宮職鑑」の詳細が分らないので、証明は出来ない。ただ、斎藤太郎左衛門、早咲、花園、永井右馬守という名が共通すること(歌舞伎年表)などが、一つの証となり得るかも知れない。

○本稿を成すにあたり、国立国会図書館・東京大学総合図書館・東北大学図書館(狩野文庫)・西尾市立図書館(岩瀬文庫)の協力を得た。記して感謝の意を表したい。